

公明

'93 No.388
November

THE KOMEI

〈特集〉 日本経済の針路

どうする不況脱出

赤羽 隆夫／野口 悠紀雄／岩田 規久男	大西 昭
景気回復のシナリオ予測	中条 潮
豊かな暮らしと規制緩和	坂本 信雄
内外価格差をどうするか	山田 鋭夫
日本資本主義とトヨタイズム	加藤 哲郎
現代資本主義を読み解く	

新政権と官僚制の再編	生田 忠秀
コンピュータ社会の光と影	天竺 啓祐
チャム族の悲劇	加藤 博
政界再編誘うイタリヤ選挙改革	後 房雄

パルスタチナ和平の展開
B.A. シロー／J. ハズモ／立山 隆司

公明 第三八二号 〈特集〉 日本経済の針路 一九九三年十一月号 公明党機関紙

旅行30年の経験と実績
皆様には素晴らしい中国の旅を
届けたいと思います。



旅行、業務渡航、文化交流、スポーツ
交流等あらゆる分野の中国旅行に
ましまして、お気軽にご相談下さい。

株式会社 日中旅行社 運輸大臣登録
JAPAN-CHINA TRAVEL SERVICE 一般第16号JATA会員

東京都港区赤坂1-3-5 赤坂アピタソノンビル
03-3583-9171 (国際営業部)
03-3583-9077 (団体旅行部) 関西支社
TEL 06-531-4649
名古屋営業所 TEL 052-561-0865
北海道営業所 TEL 011-232-2511
北京事務所 TEL 北京 5078554

ルを問うことだ。話を労使関係に限定するが、「公正なき効率」の背後に見えかくれる日本人のゲームのルールとは何だろうか。おそらく「会社中心主義」がそれであろう。国民的資源配分における「会社中心」(したがって人びとへの低い分配)でもあれば、人びとの価値意識や時間配分における「会社中心」でもある。そういったゲームのルールは、大企業男子正社員を中心として、労働側は会社への「献身」を提供し、かわりに資本側はすべて社内レベルでの「報償」(雇用保証、昇進昇給、福利厚生など)をあたえるという暗黙の妥協によって先導されてきた。その総結果があの「効率天国、公正小国」である。

しかしそうした妥協は、必然的に、労働者をして「会社人間」に駆り立てるし、そこから排除された層(中小企業労働者、臨時工・パートタイマー、女性、老人)との格差を増幅させる。だけでなく、相互の間に市民としてのコミュニケーションの断絶をもたらし、会社人間は市民の理性をうしなっていく。加えて不況下の企業リストラや経済のサビス化にともなって、企業自身も従来の「日本の雇用慣行」をそのままでは維持できなくなっている。長時間労働、閉鎖的市場制度、膨大な貿易赤字に対して、外国から批判があるのはいうまでもない。つまり国内各層ならびに外国から、トヨライスム公的妥協が強い見直しを迫られているのが今日である。

見直しのあかつきに、はたして日本が新しい制度や調整機構

混迷の時代の資本主義と経済理論

イギリスでベーカーとは、もともとパンを焼く職人のことだった。それがパンを売る店をも意味するようになるまで、三〇年かかったという(M・ハリソン『買ひ物の社会史』法政大学出版局、一九九〇年)。日本では一八八七(明治二〇)年、木村屋が菓子パンの製造・販売を始めた(渋沢敬三編『明治文化史・生活編』洋々社、一九五五年)。三編『明治文化史・生活編』洋々社、一九五五年)。急速に普及したのは一九五〇年代で、学校給食と「朝食はパン」のライフスタイルが広まったためである。日本のパンは初めから商品だった。コマ

ポスト冷戦と二一世紀を考えるためのブックガイド

現代資本主義を読み解く



をとれば逆のことがいえる。資本主義市場経済といつても、さまざまである。パンやコマの商品価値は文化や伝統にも左右される。川勝平太の「物産複合」観念が、資本主義論にも意味を持つゆえんである(「社会科学の脱領域化」『講座 社会科学の方法』①岩波書店、一九九二年)。

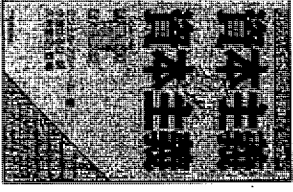
そもそも「資本主義」という言葉自体、きわめて新しい。アダム・スミスからA・マインツルにいたる古典派の系譜は、もっぱら自由競争とか私有財産制を論じた。一九世紀の社会主義者ルイ・ブランが「資本の排他的占有」を資本主義と呼び(「労働組織」一八三九年) 明治維新の頃にK・マルクス「資本論」が「資本家の生産様式」のよ

式を生み出して「効率」と「公正」を両立させた経済社会となるか、それとも見直しは周縁の部分に終わって依然として「公正なき効率」が支配するのか。いまは何ともいえない。一方で、制度は歴史的に変化していくものではあるもの、いったん出来上がった制度には慣性がある。なかなか一朝一夕には変化しないという冷厳な事実がある。他方でしかし、慣性はあるものの、制度は人びとの意識や合意が変化するれば、やはり変化していかざるを得ない。この変化と慣性の両ペクトルのどちらに力がかかるか。それは基本的に、人びとの変革への意識の強さにかかっている。政治のはたす役割は大きい。

ただひとつ明言できることは、長期的に安定し、かつある程度普遍的な経済体制というものは、「公正」のうえに「効率」を実現し得る体制以外にあり得ないということである。あのフォアサイスムの体制は—今日から見れば明らかに限界があったが、しかしそれ以前二〇世紀前半と比較すると—「公正」(生産性比例賃金)のうえにこそ「効率」(生産性上昇)を達成したのであった。つまり、レキエラシオン理論がフォアサイスム分析から得た教訓は、「公正なくして効率なし」なのである。その教訓からトヨライスム日本をみると、日本経済は今後大きくいかなる方向にすすむべきか、その方向だけは明らかであろう。

加藤 哲郎

「公明」1993.11月号



「資本主義の脱領域化」
竹内豊彦社
2200円

うな形容詞形で用いたが、広く一般に用いられるようになったのは、二〇世紀初頭にW・ソッパルが「近代資本主義」を替って以後のことである（重田澄男『資本主義の発見』御茶の水書房、一九八三年）。言葉だけをとれば、共産主義や社会主義の方が資本主義より先だった。

資本主義対社会主義という構図は、二〇世紀特有のイデオロギイ的対抗である。だからソ連・東欧社会主義崩壊を資本主義の勝利と短絡できないのは、ガルブレイス他「資本主義は勝利したか？」（JICC、一九九一年）や伊藤誠「逆流する資本主義」（東洋経済新報社、一九九〇年）の通りだ。F・フクヤマ『歴史の終わり』（三笠書房、一九九二年）の「自由民主主義の勝利」もP・ドラッカー「ポスト資本主義社会」（ダイヤモンド社、一九九三年）も、吟味してからねばならない。ポスト冷戦は限りなく不透明である。

その混沌とした理論状況は、朝日新聞企画調査室「どうみる社会主義のゆくえ」（新興出版社、一九九二年）や日本経済新聞社編「私の資本主義論」（日本経済新聞社、一九九三年）で鳥瞰できる。第一線財界から「ヘル経済学」受容者まで、資本主義万歳という議論はほとんどない。むしろ

「今日」の資本主義は、一つの世界秩序である。このことを意識的に追求してきたのが、I・ウオーライシステムを中心・半周辺・周辺の上層構造である。彼の理論は「史的システムとしての資本主義」岩波現代選書（一九八五年）がわかりやすい。より具体的に論じた「世界経済の政治学」（同文館、一九九一年）や最新の「ポスト・アメリカ」（藤原書店、一九九一年）にも、ぜひチャレンジすべきだ。彼の見解では、今日の連合体もアメリカ資本主義の衰退も、一九六八年世界システム革命の内には含まれていない。アメリカのヘゲモニー衰退は、資本主義世界システムの長期循環（コンドラチエフ循環）から引き出される。R・ギルピン「世界システムの政治経済学」（東洋経済新報社、一九九〇年）の新重商主義アプローチにも、目配りしたい。

今日、脱出口として「シモン・ペーター主義的機からの脱出口として」

「世界システムの政治経済学」(東洋経済新報社、一九九〇年)の新重商主義アプローチにも、目配りしたい。

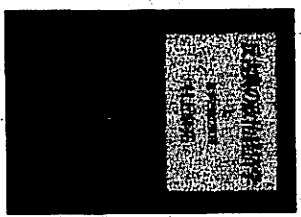
同じく長期循環への着目と、市場経済のもての技術革新や企業家精神の強調ゆえに、欧米でも日本でも「シモン・ペーター」が復活し、再評価されている。私のイギリスの友人B・ジェンツは、ヨーロッパでは「ケインズ主義的福祉国家」の危機からの脱出口として「シモン・ペーター主義的

A・コックのいう「狼狽する資本主義」(法政大学出版局、一九九三年)や、M・ナルベールのいう「資本主義対資本主義」(竹内書店新社、一九九二年)、総じて欧米資本主義の構造疲労と経済理論の混迷こそ、問題なのである。

かつて森嶋通夫が「なぜ日本は「成功」したか」(TSアソシエーツ、一九八四年)で問題にした「儲教資本主義」は、今日でも欧米の資本主義論に繰り返し現れる。パウル・クレン、トルル・○○○で「も失業率三パーセント程度という日本経済の不思議が、世界の資本主義研究を混乱させている。国内で村上泰亮『反古典の政治経済学』(中央公論社、一九九二年)が広く読まれたのも、既成の理論が説得力を失った同じ文脈においてであろう。P・ロサンブロン「ユートピア資本主義」(国文社、一九九〇年)が試みているように、ホフスタ、プロクスの時代に遡って改めて「市場」の意味を探ることも、十分に意味を持つ。

世界システムの循環、ケインズからシモン・ペーターへ?

編集部からの当初の注文は「現代資本主義を脱



『反古典の政治経済学』(中央公論社) 11240円
F112950円

かな社会「日本の構造」(労働旬報社 一九九二年)のようなメリハリある分析を勧めたい。

レギュラシオン理論とポスト・フォード主義

現代資本主義の世界史的展開に鮮やかなメスを入れて魅力的なのは、フランスに生まれたレギュラシオン理論と、アメリカの社会的蓄積構造(SA)理論である。

レギュラシオン学派の著作は、ここ数年次々と翻訳されている。全体像を知るには、ポライエ・ギョラシオン理論(藤原書店、一九八九年)や

山田鋭夫「レギュラシオン・アプローチ」(藤原書店、一九九二年)同「レギュラシオン理論」(藤原書店、一九九三年)が便利である。戦後

成長の基礎に、アメリカに発するフォード主義の著者体制と調整様式を見だし、その大量生産・

大量消費システムの矛盾の展開を分析している。アメリカSSA理論は、ポライエ・ギョラシオン・フ

ライスコフ「アメリカ衰退の経済学」(東洋経済新報社、一九八六年)「アメリカの黄金時代」(東洋経済新報社、一九九三年)

村隆英「昭和経済史」(岩波書店、一九八六年)がスタンダードだが、最近では、渡辺治「豊

度成長の時代」(日本評論社、一九八一年)や中

世界史的にユニークな時代だった。香西泰「高

戦後日本の高度経済成長は、今日からみれば、成長のあり方をふりかえることが必要だ。

てヨーロッパ福祉国家の意義を考え、日本の経済福祉国家」(青木書店、一九八九年)などで改め

に刺激を与える。田口富久治編「ケインズ主義的シビル・サイアテイ」の提唱は、こうした思考

(有斐閣、一九九〇年)の「トランスナショナル・一九九二年)や、宮崎義一「変わりゆく世界経済」

新書、一九九一年)同「断崖なき大國」(講談社道もある。佐和隆光「これからの経済学」(岩波

むしろ「グローバル・ケインズ主義」を構想するだが、地球大への「公正」原理拡大を求めて、

も、そうした文脈からたろう。らサラリーマン・学生まで広く認められている

ベーター(岩波新書、一九九三年)が財界人がかりやすい説明だ。伊東光晴・根井雅弘「シヨ

ンを重視したシヨベーターへのというのは、完全雇用のケインズから供給サイドのインフ

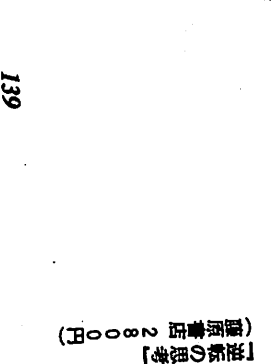
動機国家」が出現しつつあるという。需要管理、

的・制度的要因を媒介している点が、レギュラシオン理論と共通する。レギュラシオン理論の中には、フォード主義の危機から脱したポスト・フォード主義の理念型として、ほかならぬ日本の生産システムに注目するものが多い。先に挙げたジエンソフの「ケインズ主義的福祉国家からシエンベーター主義的勤労国家へのテーゼ」も、実は先進資本主義の「フォード主義からポスト・フォード主義へ」のパラダイム転換を前提し、シエンベーター主義的勤労国家の典型として、日本や韓国の技術革新や国際競争力強化への国家介入を想定している。ごく最近のA・グールド「資本主義の福祉システム——日本、イギリス、スウェーデンの比較」(英文・ロンドン、一九九三年)にいたると、公的福祉を「ニーム」にして企業や家庭に福祉を委ねた日本型福祉社会を、イギリス・スウェーデン・福祉国家の行きつく先のモデルに仕立てている。

先の本主義を眺め解く
日本企業の貿易黒字と欧米への直接投資、日本的経営の流入によるジヤパナイゼーションの進行を背景としているのだが、当の日本で「生産者中心から消費者本位」に「経済大國から生活大國」が言われている時に、欧米では逆に、日本の高い

の関心を導いた。なかでもB・コリア「逆転の思考」(藤原書店、一九九二年)は、いわゆるトヨタ・システムを「オノイズム」と命名して、これをE.C諸國の学ぶべき普遍的生産システムとした。私(加藤)とロブ・スナイデンの編集した「国際競争・日本型経営はポスト・フォードイズムか」(窓社、一九九三年)は、日本資本主義をレギュラシオン理論を用いてどう分析すべきかをめぐり、世界の研究者の交流・討論の場になっている。

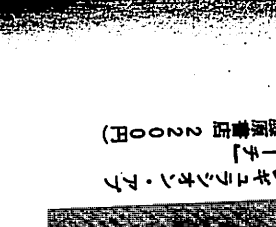
構図だ。シエンソフやグールドは、國家の経済政策を含まない日本のマクロ・システムの特殊性に着目する。限りで、C・ジエンソフ「通産省と日本の軌跡」(TBSアソシエイト、一九八二年)やK・ウォルシュ「日本権力構造の謎」(早川書房、一九九〇年)など、いわゆる「日本異質論」の系譜に連なるが、レギュラシオン学派が日本に注目するのは、むしろ、ミクロの労使関係である。資本間競争ではなく賃労働関係から出発する理論枠組みが、日本の特異な賃金決定様式・生産システムへの関心を導いた。



「逆転の思考」(藤原書店 200円)



「レギュラシオン・フロイチ」(藤原書店 200円)



「レギュラシオン・フロイチ」(藤原書店 200円)



「レギュラシオン・フロイチ」(藤原書店 200円)

日本型企業社会こそ 現代資本主義論の焦点

日本の経営システムについては、無論、国内でも多くの議論がある。専店の経営者コナーのほとんどが、A社の成功やB社の失敗についてのウハウハに関するものである。よりフリストケイトされた形では、青木昌彦「日本企業の組織と情報」東洋経済新報社、一九八九年、伊丹敬之「日本主義企業」(筑摩書房、一九八七年)、小池和男「仕事の経済学」(東洋経済新報社、一九九一年)などが、情報の共有や企業内従業員訓練を軸に、日本の経営を理論的に論じている。

しかし、ここではもっと広く、日本経済と企業社会の問題の焦点である。その所有構造における一九九一年)が綿密に分析した「会社主義」「企業レベルでいえば、東京大学社会科学研究所編「現代日本社会」全七巻(東京大学出版会、一九九〇年)や久富善之「競争の教育」(労働旬報社、一九九三年)からは、それが家庭生活や学校教育にいかにか大きなひずみをもたらしているかがわかる。

M・アルベール「資本主義対資本主義」(前掲)

や深田祐介R・ドーア「日本型資本主義なくしてなんの日本か」(光文社、一九九三年)は、金融・生産システムにおける英米型資本主義と日独型資本主義を対比して面白いが、日本型「企業社会」にまで目を広げると、暉峻淑子「豊かさとは何か」(岩波新書、一九八九年)や西谷敏「ゆとり社会」(岩波新書、一九九二年)の描くドイッは、日本資本主義とはずいぶん異なる。つまり、現代の資本主義は、今井賢一のいう「資本主義のシステム間競争」(筑摩書房、一九九二年)の中にいる。細川非良民内閣成立とドル二〇〇円時代の到来のもとで、日本の経済政策とリス財界内部でさえリストラをどこまで深化するか、トランクエアリツクが世界から注目されるのも、政治資金をどうするかで意見が分かれ、日本型資本主義がポスト冷戦から二世紀の世界の行方を考える上での焦点になっているからなのである。

日米関係のレベルでは、D・バースタイン「日米株式会社」(三田出版会、一九九三年)の主張があるのであるが、アメリカ資本主義の危機も深刻である。過労死は日本の専売特許と想っていたら、アメリカでベストセラーになったJ・シヨア

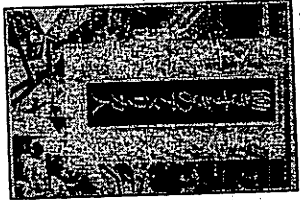
現代資本主義を解く

わち「法人資本主義」は、奥村宏「会社本位主義は崩れるか」(岩波新書、一九九二年)が鋭く述べられるように、内外で問い直されている。

より典型的には、過労死さそうみだす日本型長時間労働の問題がある。川人博「過労死社会と日本(花伝社、一九九二年)が詳しく述べているように、労働者が昨年二〇〇〇時間をきって英米なみに近づいたという公式労働時間統計は実態に合わず、働き盛りの第一線サラリーマンでは残業手当が減りサビと残業が増えただけで、年々労働三〇〇〇時間以上の「過労死予備軍」が約一千万人、国民の半数が過労死の不安を感じており、約一万人が過労死の犠牲になっている。交通事故のみである。大沢真理「企業中心社会を超えて——現代日本をシエンターで読む」(時事通信社、一九九三年)を読むと、これは日本企業が男性中心主義で貫かれていたからだと思います。

田中祐子「単身赴任の研究」(中央経済社、一九九一年)や久富善之「競争の教育」(労働旬報社、一九九三年)からは、それが家庭生活や学校教育にいかにか大きなひずみをもたらしているかがわかる。

「働かざるのアメリカ人」(窓社、一九九三年)が日本にも紹介された。アメリカでは、二〇〇二年一五〇〇労働時間をきったゆとりという。ドイツでも、東西統一の経済的コストが大きくなり、失業時間延長が議論されている。もはや世界でも日本化が進行して、福祉国家が崩れてきている。経済成長率で考えれば、むしろ中国が二世紀初頭には世界一の経済大国になるという「三エクスライク」の見通しの方が正しいかもしれない。中国の「改革・開放」社会主義市場「経済」は、実際には世界市場参入、資本主義化であり、世界人口の五分の一を占める中国がGNP世界一になるのは、ある意味では自然なことであるから。



「働かざるのアメリカ人」(窓社 2760円)

エコノミクスを超えて エコロジイ、エルゴロジイへ

だが、中国一億の人々やインドの八億の人々が、皆自動車にのりパソコンを操る資本主義を、想像できるだろうか？ すぐにつきあたるのは、ロー・クラフがついに警告した「成長の限界」(グレイモンズ社、一九七二年) 同「第一次地球革命」(朝日新聞社、一九九二年) も指摘する地球環境・生態系との関わりである。ここでは、新古典派であれ、ケインズ主義であれ、マルクス派であれ、従来の経済学の限界があらわになる。そこで、従来のエコノミクス(経済学)では「外部」とされてきた問題を扱う理論が必要になる。エコロジイ(生態学)である。環境生態系危機の実態については、石弘光「地球環境報告」(岩波新書、一九八八年) などが書店に溢れ、「持続可能な成長」は、九二年国連地球サミットで一八〇カ国政府の合言葉となった。経済・生産システムとの関係では、例えば宮嶋信夫「大量消費社会」(技術と人間、一九九〇年) が描くゴミや産業廃棄物の問題。これまでの経済学は、生産→流通→消費で完結していたが、消費の先に廃棄と廃棄物

から生じるストレス・社会問題を抽出し、人権・生存権の立場から扱う学問が、今や求められているのである(加藤「過労死とサービス残業の政治経済学」平田清明他「現代市民社会と企業国家」(同文館、一九九二年)、山口定・宝田善・進藤栄や坂本義和、大串和雄編「地球民主主義の条件」編「内発的發展論」(東京大学出版会、一九八九年) 脱出口はどこにあるのか？ 鶴見和子・川田侃

市民大学、一九九二年)で述べておいた。そこでも触れたが、冷戦終焉・自民党政権崩壊のなかで問われているのは、景気の行方や資本主義の将来ばかりではない。経済と国家と社会の歴史的關係、西欧に発する社会科学の方法と概念、資本主義を資本主義たらしめた近代工業生産の意味の問い直しも含んでいる。したがって、現代資本主義論は、より広くは世界史の再検討の一環である。M・サリンス「石器時代の経済学」(法政大

現代資本主義を眺み解く

処理を加えて、産業循環から生態系循環へと発想をトータルに転換しなければならぬ。同様に、国民所得に計算されない家事労働を考慮に入れない経済学は、男性中心社会の温存には役立つが、フェミニズムの立場からは告発される。前者についてP・エキンズ編「生命系の経済学」(御茶の水書房、一九八七年)、宮本憲一「環境経済学」(岩波書店、一九八九年)、寺西俊一「地球環境問題の政治経済学」(東洋経済新報社、一九九二年) など、後者については上野千鶴子「家父長制と資本制」(岩波書店、一九九〇年)、J・スコット「ジエスターと歴史学」(平凡社、一九九二年) を挙げておこう。

私は、エコノミクスに對抗し、それをも包摂するエコロジイ理論が生まれてきたひそみにならるて、生産力増大・労働効率向上に役立つ(エルゴノミクス(人間工学)とは別に、労働中心のリズムから自由時間・社会的時間を増やし生活リズムを取り戻す、労働・生活環境についてのエルゴロジイ(人間動態学)が必要だと思っている。内田弘「自由時間」(有斐閣、一九九三年)や平井富雄「心の過労死」(現代教養文庫、一九九二年)から日本の勤労の現状を

学出版局、一九八四年)、K・ボランニ「人間の経済」(岩波現代選書、一九八〇年) など経済人類学、F・アローナル「地中海」(藤原書店、一九九一年)、A・コルバン「時間・欲望・恐怖」(藤原書店、一九九三年) など社会史研究、E・サイード「オリエンタリズム」(平凡社、一九八六年)、謝世輝「世界史の変革」(吉川弘文館、一九八八年) のような西欧近代文明そのものの問い直し、資本主義の将来を考えるうえで、この上なく刺激的である。そして、網野善彦「日本論の規矩」(小学館、一九九〇年)や尾藤正英「江戸時代とは何か」(岩波書店、一九九二年) のような日本史の根底的見直し、実は、これからの世界を見通すための私たちにとって身近で切実な、格好の知的養料なのである。



かとう・てつろう
一九四七年、岩手県生まれ。東京大学社会学部卒業。法学博士。政治学、国家論、比較社会論(岩波書店)、「エコノミクス」の世界像(「国家論」のルネサンス)(尊文館)、「ソ連の革命と社会主義」(花伝社)他。

「地球環境報告」(岩波新書 580円)